

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第88号

平成31年5月14日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

王権篡奪計画は本当にあったのか？

公武に君臨した室町将軍、足利義満

若くして昇進し、太政大臣に上り詰める

今月の例会のテーマは、「足利義満と楠正行」。南北朝時代の後成立した室町幕府は、三代将軍足利義満時代にその原点を確立する。しかも、正行の後を継いだ楠家の頭領正儀は、吉野朝での居場所をなくし、一時細川頼之を頼り、義満に降ってまで悲願の南北朝合一を目指した。足利義満の実像に触れることも正行研究に繋がるのではないかと。

● 足利義満の公家化 ●

足利義満(延文3年1358～応永15年1408/51歳没)は、公武の境界を超えて権力を掌握し、また義満は廟堂の階段を駆け上がり、摂関や治天の君の如く振る舞うようになって行く。そして、この時代の政治は文化の支えを必要としたもので、義満の感性は、公家的教養が土台となっている。

人物叢書『足利義満』(白井信義)は、新井白石が義満の功績と掲げる5か条を以下紹介している。

1. 南北朝を統一して後代ながくその武威を誇った
2. 極官に昇り太上天皇の尊号を受けた
3. 武権を確立した
4. 武家が対外的に日本国王と認められるようになった
5. 義満時代の幕府の礼式・職制がながく武家政権の先例となった

中公新書『足利義満』(小川剛生)は、将軍職を越えたところから、その本領が始まり、義満以後の将軍はことごとく「義満のように」生きることを強制された、と以下記している。

いわゆる、義満の公家化である。

尊氏、義詮はともに権大納言で終わっており、武家としての将軍職に終始した。しかし、義満の官位待遇は祖父・父に比べて比較を絶し、右近衛大将(21歳)、従一位(23歳)、内大臣(24歳)、左大臣(25歳)、太政大臣(37歳)と若くして、しかも急激に頂点を極める。

また、義満以降の将軍の官位昇進は義満のたどった経歴

をそのまま引き継いでいる。特に、右大将と内大臣の官は重視され、必ず経歴された。義満は将軍職を越えたところから、その本領が始まるといえる。公武に君臨した室町将軍・王権篡奪計画が語られる所以である。

そして、多彩極まる事跡がそのことを裏付けるとして、以下その例を挙げている。

*官位の昇進のたびに公武を挙げて拝賀や大饗、牛車始などの大掛かりな昇進儀礼を行う。

*壮麗広大な邸宅を建造し、そこに二度の行幸を迎える。

*巨大な禅宗寺院を造営し、顕(天台)・密(真言)をも統合させ、自身のための宗教空間化する。

*権勢の象徴として360尺(109m)にも達する七重の高層タワーを屹立する。

*伊勢・南都・山門・高野山など主要寺社に何度も参詣。随員は奇抜なファッション。

*九州から東海まで、全国各地に遊覧。

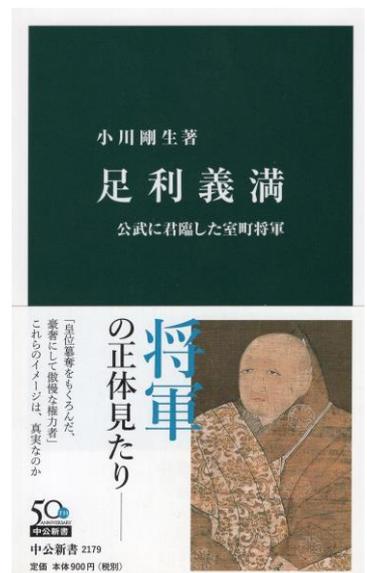
*外国の使者を迎接

● 贅を極めた拝賀・行幸を演出 ●

右近衛大将となると、義満は拝賀をするが、同書は源頼朝の例と比較をしている。

<源頼朝の拝賀の隊列>

猪飼4人、御厩舎人4人、将曹・将監・府生・庁長官各



一人で4人、前駟笠持・前駟各10人、番長、頼朝の車（車副2人、白張、牛童）、近衛舎人5人、雑色7人、雨皮笠持10人、布衣侍7人、扈從の公卿・殿上人計3人、御調度懸1人、隋兵7人 計70余人

このそれぞれが複数の従者を随え、内裏・仙洞・撰関家へと威儀を正して進むのである。

＜義満の拝賀の隊列＞

しかし、義満の拝賀は、周到な練習を繰り返し、室町第を造営して、拝賀の日を迎える。

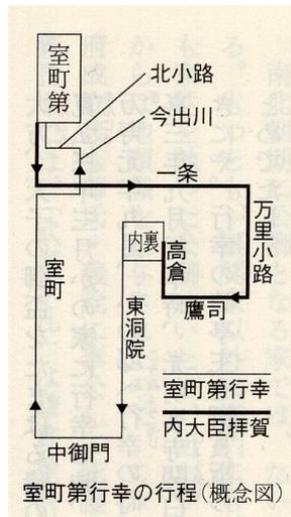
その隊列は、前駟笠持10人、居飼4人、御厩舎人4人、一員3人、殿上前駟37人、地下前駟10人、番頭8人、帯刀24人、番長1人、義満の車（車副2人、牛童、雨皮持、仮御隨身、笠持各1人）、下臈御隨身5人、雑色10人、御後官人3人、衛府侍10人、扈從公卿21人、布衣馬打13人 計169人を、侍所の山名義幸が率いる100余騎が先導して行った。

頼朝の例によるも、数倍する規模に上り、公卿・殿上人がごぞつて従ったことは頼朝の拝賀には見られないことであった。

公家化の象徴ともいえる行事、後円融天皇の室町第行幸は贅を尽くしたものであった。

義満が右大将として先導する行粧は、移馬の居飼、御厩舎人、番頭10人、太刀帯の侍20人が前行し、義満は5尺に余る雲雀（ひばり）毛の馬に跨り、隨身・副舎人が馬の口を取り、馬副・仮隨身・侍ら数十人が従う堂々たるものであった。

また経路は、土御門内裏から室町第へ直行するのではなく、東の洞院を南行、中御門を西行、室町を北行、一条を東行、今出川を北行、北小路を西行、再び室町を北行するという遠回りを選び、其の日の酒宴は、申の刻（午後4時ごろ）から深夜に及び、3月11日から3月16日まで続いたと云われる。そして舞御覧・和歌・蹴鞠・三船等の遊びが興じられた。



● 肯定説と否定説、真っ向対立 ●

ところで、義満の皇位篡奪計画は本当にあったのだろうか。今谷明は、著『室町の王権』の中で、義満の王権篡奪計画を断定的に説き、小川剛生は、著『足利義満』の中で、義満は天皇制を損ずるようなことは一切していない、と説いている。

まず、今谷明の肯定説はこうだ。

義満の篡奪計画の最終局面は未遂に終わったので、具体的様相については推測の域を出ない。篡奪の意図そのものを疑問視する学者もあるが、”叙任権闘争”以来数々の義満の、いわゆる「僭上」行為、ことに百王説の流布などはこれを篡奪意図と結び付けずしては、到底、理解不可能な事象である。

あえて、ここで大胆な臆説を披露すれば、義満の將軍職は、そのまま温存して幕府機構を総括せしめ、その弟の義嗣を天皇に据えて足利氏で將軍と天皇を独占し、その政権を盤石の安泰に置くというのが義満の構想だったと思われる。

義満の行為は、後小松に強要して禪譲に誘導するか、あるいは気長に後小松の病死を待つか、ともかく後小松から皇位を義嗣に移すというのが義満の目論見であったことはほぼ間違いあるまい。

一方、小川剛生の否定説は次の通り。

義満が明らかに「治天の君」（この場合は鳳凰）を意識して行動し、かつ周囲も法王に準じて待遇したことは、史家が種々の微証を挙げている。そこで義満が皇位を奪わんとする野望を抱いたとする論がある。そのもっとも代表的かつ淵源にあるものが田中義成の説で、義満は「皇位窺視」、すなわち後小松天皇を退位させて鍾愛するわが子義嗣を即位させる腹積もりであったとし、「彼が最終の目的は愛子義嗣を天子と為し、己自らは太上天皇たらんとするにありし事疑うべからず」と述べた。（『足利時代史』）。

臼井信義『足利義満』もこの説に少しく好意的に触れており、更に近年、今谷明氏『室町の王権』が、義満に「皇位篡奪計画」があったと断言して話題を呼んだ。

「窺視」「篡奪」といった刺激的な言葉は、客観的な考察を妨げるが、義満に数々の「僭上」の振る舞いがあり、あるいは現実に太上天皇の尊号宣下があったとしても、そうした野望を云々することの謬（あやま）りはすでに明らかにされている。

天皇は子であっても君主、上皇は父であっても臣下である。太上天皇の尊号とは天皇が臣下に贈る身位であり、義満がたとえ如何なる破格の待遇を受けようと、それは後小松天皇との関係に基づく。義満は後円融とは対立したが、天皇を頂点とする体制を損ずることは一切していない。

従って、「義満の上皇待遇」と「義嗣の即位」とは全く次元の違う事柄で、この学説への批判は、櫻井栄治氏の「そもそも皇統は天皇（の血）から発生するものであって上皇（の号）から発生するものではない。この最も基本的な理解を忘れた点に『義満の皇位篡奪計画』説の誤りがあったといえよう」（『室町人の精神』）という言に尽きている。

中世社会において、武家はもとより臣下が天皇を自称する可能性は皆無である。

先に、小川剛生は、臼井信義『足利義満』に触れているが、関係する件は同書には以下の通り書かれている。

義満は義嗣をどうしようとしたものであろうか。果たして義持に代わって足利將軍としようとしたのか、またはこれを公家として取り立てんとしたものか、あるいはまた一部の説のように義満に果たして皇室を傾けんとする考えがあったか否か、それらはすべて推測の域を出ない。

（文責『四條畷補正行の会』代表 扇谷昭）

